

随泉寺寺報

2003 年 7 月号

第 395 号

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

安居会法座

講師 教得寺前住職 大佛 宣正師

講題 「み仏にいだかれて」

『褐色の根府川石に 白き花 はたと落ちたり、ありしとも 青葉がくれに見えざりし 沙羅の木の花。』 森鷗外

新緑の美しい季節を迎えました。梅雨の晴れ間に、雨に洗われた緑も風も光も生き生きとしています。時間の流れを感じる季節でもあります。今頃時々見かける花に沙羅の樹があります。この娑羅の樹と沙羅双樹の樹は、全く異なるものです。沙羅の花というよりも、夏椿と言った方が通りが良いでしょうか。沙羅双樹は、お釈迦（しゃか）様が亡くなったときに



近くに生えていたことで有名で（平家物語の、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す」でも有名）一つの根から二つの幹を生じるので双樹と呼ばれます。ですからお葬式に用いる紙華花はこの沙羅双樹をまねたものです。お釈迦様がなくなられたのは2月の15日です。冬なので葉っぱが枯れていたのですが、亡くなられた後、青々と緑に変わったという故事に習って、青い葉っぱの樹と変えるのです。双樹ですから2本ずつ四方に立てます。昔はこれを講中の方々が作っておられました。納骨の時もこれを四方に立てられました。段々こうした風習がなくなるのも寂しい気がします。

7月の法座予定

- 7月 2日午後6時より……本部役員会
- 7月 14日昼席午後1時より……安居会法座
- 7月 14日夜席午後7時半より……出張法座 桑原 今岡清彦氏宅
- 7月 15日朝席午前10時より……安居会法座
- 7月 15日昼席午後 1時より……安居会法座
- 7月 19日昼席午後 5時より……ビアガーデン



目の前にある恐怖

高速道路で車が故障しました。6月27日のことです。昼から福山で研修会にお話を頼まれていたので車で出かけました。朝から雨が降り続けて、気温が上っていたので東広島あたりは濃霧で、視界が500メートルぐらいしかありませんでした。急に車のエンジンが止まり、アクセルを踏んでも車は反応しません。ようやく車を左端に寄せてとまりました。しかしそこは丁度高架の橋の上。路肩は1メートルもありません。私の車は半分ぐらい走行車線にはみ出しています。とても危険です。最近 高速道路での事故が頻繁に発生している事はテレビで報道しています。路肩に止まっていた車に後続の大型トラックが、追突し炎上して死亡したというニュースを思い出しました。頭はパニック状態です。どうしていいかわからず、携帯電話でとにかく 坊守りに電話しました。『高速道路で車が故障した、助けてくれ』それから110番しました。警察は危険だからすぐ車から離れて外の安全な場所へ避難するようにとっています。しかし橋の上です。安全な場所などありません。外へ出るのも危険です。濃霧の中から大型トラックが猛スピードでやってきます。生きた心地がしませんでした。イラクの戦争で大砲の弾が飛んでくるというのもこんなことでしょうか。車が来ない隙を見て外へ出てみましたが、何処も危なくて立っておれません。結局又車に戻って後ろばかり見ていました。大きな車がクラクションを鳴らしながら横をすり抜けていきます。"あつづつかる"というのが何回もありました。さすがにこのときは恐怖心でいっぱいでした。パトカーの赤いランプが見えたときは、ほっとしました。しかしよく考えてみると 気がつかないけれども、毎日死の危険の隣で生きているのかもしれない。それに気が付かないでいるだけなのかも……。死んだらお浄土に参って仏となるといっても死にたくはありません。まさしくこの身が可愛いのです。



少年少女の集い 一泊研修会(小学4年～6年)

例年の通り8月4日(月)～5日(火)と少年少女一泊研修会を開催いたします。夏休みの2日間ですが、楽しい思い出が出来ればと思います。今年も出来るだけ楽しい企画を考えています。友達を誘ってたくさん参加してください。



少年少女の集い 一日研修会(小学1年～3年)

8月5日(火)少年少女の集い1日研修会を開催します。朝から昼過ぎまでの半日ですが4年生～6年生の人と一緒に楽しい一日が過ごせたらと考えています。

第3回随泉寺ビアガーデン

蒸し暑い梅雨をビールでも飲んで吹き飛ばしましょう。今年も随泉寺ビアガーデンを開催します。どなたでも参加自由です。誘い合わせていっぱい飲みましょう。

7月19日午後5時より 会費 1000円



孤独を背負うもの（3話）

< 沙羅の花 >

沙羅の花というよりも、夏椿と言った方が通りがかり同じ科に属すと言えど、沙羅の木は 大分鬼っ子べ、沙羅の葉は葉脈こそ しっかりしているものの厚い。色も初夏に相応しい爽やかな黄緑色。このくことはありません。あくまで浅い緑色を保ちます。してしまうんですね。



良いので、
みはな
先、夏に
そして、



しょうか。本家本元の椿と同じです。まず第一に葉。厚みがく、光沢もなく、その代わりに向けて少しは 濃もなりますが、これが一番の違いでしょうが、



く、ツバキ科の植物です。しあり光沢のある椿の葉に比うっすらと微毛を生やしてそれでも椿の苔緑色に近付沙羅は秋になると 葉を落と

表皮が剥がれるのも沙羅の木の特徴です。一遍に剥がれるのではなく、丁度 日焼けした皮がペリペリと剥がれるように、少し ずつ剥がれていきます。これも 椿にはないものです。剥がれた皮の下はミルクを混ぜた小麦色のような微妙な、でも思わず触れたいような滑らかな感じを持っています。古い皮と新しい 皮が交互斑になっている様子は鹿の子模様にも似ているようで見ていて飽きる ことはありません。

皮が剥がれる、といえは百日紅がありますね。しかし、沙羅の 木は百日紅程一遍に剥がれるわけでないんですね。あくまで少しずつ剥がれて いくのが沙羅の幹です。また年数が経てもそれほど太く大きくなり、と いうのも沙羅の木の特徴の一つといえましょう。すっきりした幹といつも若々しい 樹肌、浅緑の葉が繁る沙羅の木は、永遠に老成しないような雰囲気があります。

花は流石に夏椿と言われても頷ける、白椿に酷似した趣があります。良く見るとやはり花びらも薄く、縁には皺がよって先には細かい切れ込みがあるところなど 差異は幾つか見つけられます。が、花が丸ごとほとりと落ちているところなど、 成る程椿を冠しただけあるなあとされます。ただ、花を鑑賞するとして育成 されたわけではないのか、椿程の花数は望めません。

大抵は以前お話した柿の花同様、地に落ちているのを見て花を知ります。 そうか、もうそんな季節なのかと見上げて花を探すのですが、容易に見つけられるのはそう多くはありません。明るい黄緑色の葉に隠されるように花の白が見え隠れしてはいるのですが。沙羅の木自体、庭木としては結構な高さになるのも見つけ辛い理由の一つかもしれません。届かない花程欲しくなる、という理論でしょうか、手折って飾るというわけでもないのに、つついムキになって花を探してしまうんですよ（笑）

花だけを間近で見たいのなら、落ちたばかりの花を拾い上げるのが一番楽でしょうね。これからの季節なら、広めの水盤に浮かべて飾るのも涼を呼ぶ取り 合わせとして喜ばれることでしょう。

卵の黄身のような色をした蕊と、絹のような白さを持つ五つの花弁の取り合わせは、初夏の爽やかな風情を映し込んだかのようにも思えます。

【沙羅双樹】

沙羅の花、というと娑羅双樹を思われる方も多いのではないのでしょうか。平家物語の冒頭でも『祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 娑羅雙樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす』とあったものです。

娑羅の木は釈迦が入滅する際、 その臥床の四辺にあったと伝えられるものです。一つの根から二つの幹を生じる ので双樹と呼ばれます。

この娑羅双樹と日本にある沙羅の木は、全く異なるものです。沙羅の木がツバキ科、娑羅の木がフタバガキ科というように、植物学においても全く別 の物として分類されています。夏椿という名は娑羅との混同を避けるために付けられた名でしょうか？

娑羅を調べましたが手持ちの物では写真はなく、図でしか見ることは出来ません でした。しかし手書きの図でも花の様子はかなり異なります。中央の蕊は似たようにも見えますが、先細りした花弁は到底同じものとは思えません。

一説に、つるつるした幹が似ているので混同されたとも言われていますが幹の様子について迄は述べられていませんでした。沙羅と娑羅についてはまだまだ調べることが 多そうです。

孫とオバアチャン

出宮 田村 制自

三代目、今では死語に等しく若い人には 聞いたことないわ・・・と言われるかもしれないが、つまり私から言えば孫のことです。この小三で女子の孫のことを思いつくままに書いてみました。私の思う様な三代目になるか 今から予想をすること自体が無理もあるでしょうが・・・

ひるがえって孫から見ると、生まれたとき自分の両親以外に祖父が二人 祖母が二人それに養家の祖父と祖母・曾祖父と曾祖母が、二人で併せて九人の外野席が居合わせて、これらが入れ替わり立ち代わり、自分の寝顔をのぞき込むから孫に取っては、さぞかし迷惑なことで・・・その三代目もぼつぼつ個性らしきものが出てきて、話の仕方、声の出し方それに、お定りの顔の形とか、目の形、顔の白いのは、皮膚のキメの細かいのは誰に、にているとか、つまりは年寄りの我田引水が数年続いて・・・。

曾祖母、養家の祖父、曾祖父、曾祖母、と鬼籍に入り 昨今は静かに成りましたが・・・

その孫がボツボツ口が利ける様になると一番手、つまり私の母が、自分の呼び名を心配し始めて・・・確かにヒイオバアチャン・ヒイバアチャンでは今ひとつピンとこない・・・そこで自分が住んでいる地名を取って広島のおバアチャンに・・・

その前に広島のおバアチャンのプロフィールを少々・・・ひとことと言えばこのおバアチャンは短気で我がままで ヒステリーで反面では大変に人当たりが良く友達も多く人に話しかけるときもゆっくりと話しかける 相反する二面性を、多分に持ち合わせていました。

伯父(母の兄)に寄れば父が甘く育てたからな・・・お茶とお花ぐらいまでならいいが日本舞踊から そのころ流行のチャールストンまで踊って意気揚々としていたよ・・・。戦後は社交ダンス(ワルツ・タンゴ等)に凝り カラオケが流行るとカラオケを、社会が安定して、新幹線が開通し、航空機も一般の人々が利用できるような料金になると、国内・海外と観光旅行にと走り続けて、父親(母の父)が母のためにと残してくれた、まずまずの蓄えをあらかじめ使いケロツとして人生は楽しく生きねば・・・。

晩年に血圧が高いときに、病院の先生に頼んで預かって貰うと、我がままばかり言うて先生や看護師さんに迷惑を臈けて・・・いいかげんにしなさいと子供達が怒ると・・・知らないよ オジイサンが、こんなに私を育てたんだ・・・平気で言っただけ・・・母の能書きが長くなりましたが、この広島のおバアチャンと 孫のSちゃんをよく似ているところを少し書いてみました。このSちゃんと、広島のおバアチャンの三歳ころの写真を比べて見ると全体の雰囲気がよく似ており・声がひとよりオクターブが高く・目がクルクルとよく廻り・おしゃべりで・お話しが大好きで・またSちゃん、この3は逆さだよ・・・これでいいの・・・ジタンダを踏んで言い張って譲らない三歳ころのことでした。



呼んだら返事をしなさい・・・イイノ・イイノとくる・・・遊んだあとのお片付けをしなさい・・・あとで・・・先送りのSちゃんだ・・・

まあ、じいちゃん、ばあちゃんからすれば子供の妖は親の義務で、甘やかすのはこちらの特権で・・・幼稚園や学校に行かないと言ったこともなく・・・。

天真爛漫に育っていると、言えば聞こえも良いが、広島のおバアチャンの二代目ができあがる様な気もする昨今です。でも、このSちゃん学校がお休みの日には、仏壇の前で広島のおバアチャン おはようと言いながら線香を挙げて手を合わせてくれます。

Sちゃん健康で幸せに育ってね・・・じいちゃん、ばあちゃんの思いです・・・



孤独を背負うもの

藤沢 量正師

人間は、いつも二つの矛盾した中で生きています。その一つは、独りであるという厳粛な事実であり、他の一つは、一人では生きられない、仲間がほしいという実態です。

この孤独的な存在であると同時に、社会的な存在であるという相反したなかに生きているもの、それが「苦悩の有情」と言われる私たちのすがたでありましょう。

北原白秋は、こんな詩をつくっています。

二人で居たれど まださびし
一人になったら なほさびし
しんじつ二人はやるせなし
しんじつ 一人は耐へがたし

かつて 群衆の中の孤独 ということばがよく用いられました。哲学者の三木清も、孤独は山のなかにあるのではなく、街のなかにある。一人のひとのなかにあるのではなく、おおぜいの人間の間にあ

る。と書いています。人間はどこまで行っても孤独を背負うて生きているのです。

人という文字は、何か支えがなければ倒れるという意味をあらわしていますが、この人生のなかで、未通ってこの私を支えきってくれるものはありません。何ものをも当てにならぬと知られたとき、苦が生まれます。悩みが生じ、絶望の涙を流したりします。その抜きがたい苦悩を抱く私たちがあればこそ生まれたもの、それが阿弥陀如来の「汝救わずば」の誓いでありました。私があつて佛のねがい生まれたのです.....。

